



座禅に興味を持つ西洋人

アメリカやヨーロッパのキリスト教を中心とした文化圏の中で育った人たちの中で、西洋の近代思想やキリスト教文化に飽き足らなくなった人たちが興味をいだき出会うものに禅宗があります。もう少し具体的にいえば、禅宗というよりは、座禅という行為に興味を持つといった方が、もっと事実に近いのかも知れません。

もちろん、彼らは仏教というものを知って座禅という行為に興味を持っているわけではなく、西洋文明にはない、東洋のエキゾチックで不思議な行為に興味をいだくといったレベルで、座禅に興味を持っているようです。

いわゆる禅宗で行う座禅は仏教で説く禅定を極端に変形させたものですが、禅定という考え方や行為がキリスト教にはありませんから、より広い教えと感ずるのも当然といえば当然のことです。彼らの馴染んでいるキリスト教から得た知識や経験からすれば、仏教の基本のひとつ、禅定が、未知の新しいもののように思えるのでしょう。ところが、彼らを魅了する禅定という考え方は仏教で説く三学（戒・定・慧）のひとつであることは、仏教を少し学べば理解できる事柄なのです。また、この三学は、仏道修行の基本であることも初歩的な常識です。

ここで戒・定・慧の三学について少々ふれてみることにします。戒は禁戒で、悪を止め非を防いで善

を修することです。定は禅定で、心を一所に定めて雑念を払い安定した境地に立つことです。慧は智慧で真理を照らし顕すことです。この三学は、相互に補完しあう関係ですから、どれが欠けても仏道修行は成就しないこととなります。このことから、禅定だけを拡大、フレイムアップした禅宗は、三学のうちの二つが欠けた奇形の宗教であることがはっきりわかります。

たとえば、ぜんざいを作るのには、小豆（あく）と砂糖と塩が必要ですが、その中の塩だけでぜんざいを作るうとすればどうなるでしょう。2リットルの水の中に塩だけを1リットル入れてみたします。すると、非常に濃度の高い塩水ができます。そんなものは誰も飲もうとも食べようともしませんし、それがおいしいぜんざいなどとは言いません。そんな濃度の高い塩水を飲めば、体をこわし病気になるってしまいます。

これと同じように三学のうちの二つを欠いた禅宗は、それを信仰しても功德も利益もないばかりでなく、かえって、その人を不幸にしてしまうのです。

禅宗とはどういう宗旨か

日本には、単に禅宗という宗旨はありません。臨済宗、曹洞宗、黄檗宗を総称して禅宗と立っています。しかし、三宗とも祖師を達磨（だるま）と立て、「教外別伝（ぎょうべつでん）、不立文字（ふりゅう

うもんじ）、直指人心（じきしにんしん）、見性成佛（けんしょうじょうぶつ）」を教えの中心に置いています。

教外別伝とは、真実の教えは文字や言語によるのではなく、心から心へ伝えるのであり、そのため、不立文字（文字を立てない）で、経典は必要ではないと教えます。釈尊の教え（経典）を否定する仏教があるということ自体、まことにおかしな話ですが、そのような宗旨が禅宗という名で実際に存在するのです。

ところが、文字や言語を否定すると、なにも伝えることができずから、狡猾（こうかつ）にも、経典を用いるのですが、その経典は「月を指す指」にすぎない。悟りの月を見たならば、指（経典）は不要であると説きます。賢明な人なら、ここまでくると、まるで子供だましのような論理構造にあきれ果ててしまうでしょう。

私たちは、文字や言語によって、先人の努力の積み重ねである多くの文化を学びますが、学び終わった途端、それを教えてくれた文字や言語を不要である、必要ないなどと言えば、狂人と思われるも仕方がないのでしょうか。禅宗の教義は、このような構造を持ちながらさらに進んでいきますが、あきれ返らずに、最後までお付き合い合えれば幸いです。

次に直指人心とは座禅観法による時、直ちに己の心を指すといい、見性成佛とは、この観法によって、己心の内心に仏性を具えていることを知覚する

禅宗とは、

どのような宗教か

仏法は、どのように受け継がれているか

と言つのです。これをわかりやすく言えば、禅宗では、悟りの境涯に到達するためには、なにも煩わしい教理分析の研究にまたなくても、座禅修道によって自ら体得し、把握ができるとします。この根拠に『大梵天王問仏決疑經』(だいぼんてんのうもんぶつつけつきぎょう)なる經典を引用するのですが、またまた、この經典がくせものなのです。というのも、この經典は、釈尊の經典を網羅した大蔵經典の二大目録と言われている貞元録にも開元録にもその名がありません。という事は、この目録の編集後に現れた經典ということになりますが、訳者も年号も共に不明ですから、釈尊の説かれた經典ではなく、後世に、誰かが作爲的に作った偽(にせ)の經典なのです。經典は不要だと説きながら、教義の根拠を經典に依拠するという矛盾もさることながら、その經典が二七經典だということ

は、まさに、禅宗らしいといわざるを得ません。それに、禅宗のように釈尊の説かれた經典から学ぶこともなく、ただ、欠点だらけ、間違いだらけの自分自身を見つめていれば仏の悟りを得るなどと言う戯言(たわごと)は、大慢心、大増上慢の証拠でもあります。

仏法は、仏の説かれた教えにより導かれるものであつて、それ以外の、自分自身の觀念観法によるなどという説は、仏法ではありません。涅槃經には、「仏の所説に従わざるものは魔の眷属(けんぞく)也」とはっきりと説かれています。これは、まさに禅宗の有り様を言い当てているではありませんか。また、これらの事実から、日蓮大聖人は「禅宗は天魔の所為なり」と厳しく破折されています。このことから、禅宗は地獄の業因となる邪宗教であることがよくわかります。

釈尊が説かれた經典は五千、七千といわれる

ほど数多くありますが、それらには順序次第があり、それは浅きより深きへ、権教(仮りのおしえ)から実教(眞実の教え)へと導かれているのです。そして、釈尊がこの世に現れた本懐(眞の目的)は、それらの教えの中でも最も優れた法華經を説くためにあつたのです。

法華經を説く直前に説かれた無量義經には、「諸(もろもろ)の衆生の性欲不同(しようよくふどう)なることを知り。性欲不同なれば種種(しじゆじゆ)に法を説き。種種に法を説くこと、方便力を以てす。四十余年には未だ眞実を顕さず」と説かれています。

このように、釈尊が説かれた一大聖教の中で、法華經を説く以前の教えは、方便の教え、仮りの教えであることを釈尊自らが、はっきりと宣言されているのです。

それでは、法華經には一体なにが説かれているのでしょうか。釈尊が亡くなられて二千年が経つと末法という時代に入ります。末法では、釈尊の説かれた經典のみがあるだけで、修行も功德もなくなる時代となります。

そこで現れられるのが末法の仏様であり、その仏様が、どのようなお方かが法華經には説かれているのです。

法華經には、その仏様は、末法に現れて法を説くが、ある時は、しばしば所を追われ、また、ある時は、時の権力者や出家在家の人々に迫害を受け、石を投げられ、杖で打たれ、あまつさえ、刀の難まで受けられながら、一切衆生を成

仏に導き、幸せにする法を説いていくと説かれています。その仏様は、末法の衆生の闇を払い、人々がもっている尊い命を輝かせる大白法を所持され、その法を説くために、いかなる難も耐え忍ばれるのです。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を救うために、法華經に予証された通り、数多くの法難に遭いながら、唯一無二の法を説かれました。そのお振る舞いは、まさに、法華經に説かれたそのまを身をもつて行じられ、まさに、末法の仏様であることをその行動によって証明されたのです。

眞実の宗教とは

人は、苦しいことや悲しいこと、また困難なことに出会ったとき、それを解決し克服する方法について思いをめぐらします。しかし、その解決方法を見いだすことは容易なことではありません。

仏法では、生・老・病・死など人間だれもが直面する人生の本質的な苦悩を根本的に解決する道を説き示しています。そして、その本質的な苦悩を解決せずして、眞の幸福はありえないと説いています。

眞の幸福とは、觀念的なものではなく、因果の道理をもととした正しい信仰によって、自己の内面にある健全な生命を確立し、深い智慧と強い心を養うことによつてはじめてもたらされるものなのです。

さて、「正しい」という字は一に止まる、と書きますが、正しい宗教が二つも三つもあるわけはありません。釈尊は、十方仏土の中には、ただ一乗の法のみ有り、二無く亦(また)三無

し、と法華經に説かれています。

このことからわかるように、末法に生きる現代の私たちが信じるに足る正しい教えは、ただひとつしかなく、その教えを説かれた方は、末法の仏様である日蓮大聖人なのです。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を眞実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華經を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七百五十年間にわたつて現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院(池袋)で歡喜に満ちて信仰に励んでいます。どうか、みなさんも、眞実の仏法と出会つて、かけがえない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。

